

42 PMD病棟に於ける頑癬について

国立療養所南九州病院

久保照子 山下百合
吉永京子 阿久根ノブ
坂元和代 藤園喜美子

PMD患者は、思春期になると大半の者に頑癬が発症する。当病棟でも、昭和48年以降の頑癬の発症率の変化を調べたところ（図1）のように、50年から急に増え51年夏には男子患者の40%も発症が見られた。そこで、頑癬発症の誘因を調べ対策を立て、良い結果を見たので報告する。

まず、月別発症分布では、雨期と夏期に多かった。これは、高い湿度と発汗が多い事によると思われる。又、これらの頑癬発症が、

PMD特有の問題なのか、あるいは、看護上の問題なのかを知るため、PMDとほぼ共通した10才～29才の男子で同じ機能障害を有すると考えられる重心病棟との比較を行なって見た。（図2）のように発症率は重心が29人中6人で21%、筋ジスが33人中24人で73%であった。次に年齢別発症率では、思春期に相当する11才～15才の間に多く見られた。又、障害度別発症患者の割合を見て見ると、（図3）のように障害度が進むにつれ発症率も高くなっている。これは、拘縮が進むと車椅子使用者も多くなり、股間部の通気が悪く頑癬が発症しやすくなると思われる。これらの点から、次のような対策を立ててみた。

〔対策〕

- ① アルコールにて陰部清拭後、タオルで水分を十分に拭き取り乾燥させ軟膏塗布後更衣を行なう。

図1

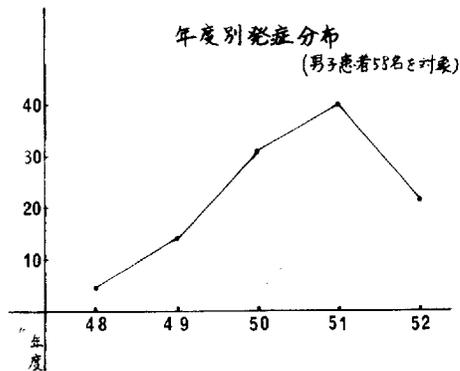
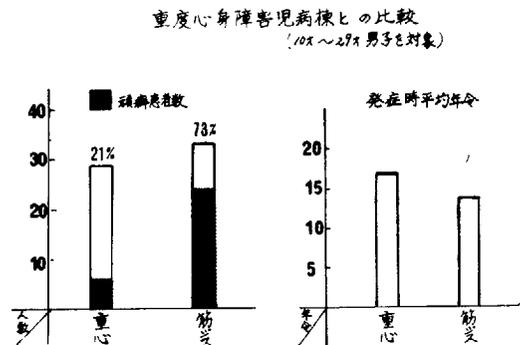
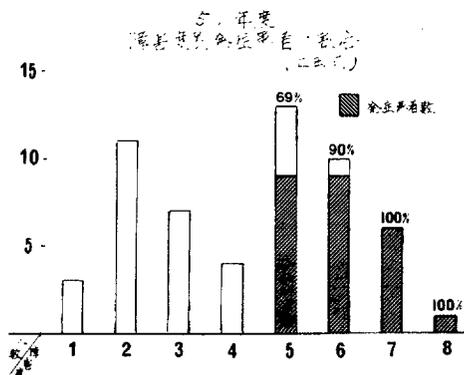


図2



- ② 下着・尿器・便器車等の消毒。
- ③ 週2回の入浴時、酸性石けん使用
アカスリを1人1枚ずつにし、必ず新しいものを使用、陰部を念入りに洗う様職員に指導。
- ④ 夏期は薄手の半ズボンを着用させる。
- ⑤ 今まで長期外泊のため、頑癬が悪化状態で帰院していたため指導要項を作成し、家族指導を行なった。その結果52年夏には22%とかなり減少して来た。

図3



〔考 察〕

以上、頑癬発症率についてさまざまな角度から検討して来たが、発症率と月別・年令別および障害度別との関係については納得の行く結果であるが、ただ重心患者と比較して、筋ジス患者の方に特に発症率が高いことは注目すべき結果である。この原因として考えられる事は、大きく分けて、①患者側の問題、②生活環境の問題としては、疾患特異性としてPMD患者では、拘縮・発汗・肥満以外に、皮膚そのものの、特異性も推定可能である。

次に生活環境の問題として、重心病棟では、夏期に冷房設備のある事も考えられる。最後に看護上の問題としては、重心病棟と比較してむしろPMD病棟の方が、頑癬の予防および処置に対して気を配っているように思われるが、私達が51年夏対策を実試した結果、52年夏には22%に減少し、現在では頑癬発症は1例も見えていない。これは私達の実試した対策が、治療および予防に対し比較的有効であったと思われる。又、現在行なっている対策としては強度な股間部の拘縮のため、冬でも頑癬をくり返していた患者を、清拭・更衣と1日3回の通気をやっておりますが、これも52年秋より頑癬の徴候を見ずある程度予防になっているのではないかと思われる。

〔おわりに〕

当病棟でも重症化し、思春期を迎える患者も多くなり、身体的ハンディから精神的な面に及ぼす影響が大である。

そこで、患者の羞恥心等を考慮し、予防に重点をおく看護を今後検討して行きたいと考える。

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

PMD 患者は、思春期になると大半の者に頑癬が発症する。当病棟でも、昭和48年以降の頑癬癬の発症率の変化を調べたところ(図1)のように、50年から急に増え51年夏には男子患者の40%も発症が見られた。そこで、頑癬発症の誘因を調べ対策を立て、良い結果を見たので報告する。

まず、月別発症分布では、雨期と夏期に多かった。これは、高い湿度と発汗が多い事によると思われる。又、これらの頑癬発症が、PMD 特有の問題なのか、あるいは、看護上の問題なのかを知るため、PMD とほぼ共通した10才~29才の男子で同じ機能障害を有すると考えられる重心病棟との比較を行なって見た。(図2)のように発症率は重心が29人中6人で21%、筋ジスが33人中24人で73%であった。次に年令別発症率では、思春期に相当する11才~15才の間に多く見られた。